

心ゆくまで味わう 法然さまの 『選択集』

大正大学教授
林田 康順



第16章
釈迦如来弥陀の名
号を以て慇懃に舍利
弗等に付属したまう
の文②

浄土宗で、第一の聖典、と位置づけられる書物『選択本願念仏集』（『選択集』）を
大正大学教授・林田康順先生が解説。

『無量寿経』『観無量寿経』 における「選択」

【現代語訳】

私釈

（『無量寿経』における3種の〈選択〉の続き）
第二の〈選択讃歎〉とは、第5章において明らかにしたように、浄土往生を願う者の資質や能力を上中下の3種に分けた（三輩）を説いた箇所、さとりを目指す心を起こす菩提心などの諸行を『無量寿経』では列挙してはいるものの、その結びで釈尊は、これらの諸行を（讃歎）されず、ただお念仏一行だけを（讃歎）されて、「この上なく大きな功徳を具えている行である」と言及されています。それ故、〈選択讃歎〉と云うのです。

第三の〈選択留教〉とは、第6章において明らかにしたように、同じく『無量寿経』の（三輩）について説かれた箇所、さまざま善行を列挙してはいるものの、結びの箇所において釈尊は、満足に行を修められる人も、ましてやさとりを開く人もいない、仏の教えのみが残るといって一万年におよぶ末法の時代を過ぎて、仏の教えさえ滅び尽くしてしまふ法滅の時代を迎えたとしても、ただお念仏の教えだけを（選択）して留め遺され（留教）しています。それ故、〈選択留教〉と云うのです。
次に『観無量寿経』にも3種類の〈選択〉が説き示されています。第一に〈選択撰取〉、第二に〈選択化讃〉、第三に〈選択付属〉です。
第一の〈選択撰取〉とは、第7章において明らかにしたように、『観無量寿経』では、静めた心で阿弥陀仏のお姿や極楽浄土の莊嚴を観想する善行（定善）や散乱する心そのままでも修められ

る善行（散善）といった諸行が説き示されてはいるものの、阿弥陀仏は、そのお身体から放たれる光明で、お念仏をと念えている者だけを明るく照らし出し、救い取って（撰取）、決してお見捨てにはなりません。それ故、〈選択撰取〉と云うのです。

第二の〈選択化讃〉とは、第10章において明らかにしたように、浄土往生を願う者の資質や能力を9段階に分けた（九品）を説いた箇所、多くの罪を犯してきた下品上生の者が、臨終にあたり、説法の形式によって12通りに分類したさまざまな仏典（十二部経）の深い意味合いを聞くこと（聞経）と、〈南無阿弥陀仏〉とお念仏をとなえること（称仏）の二つの行を修めたものの、阿弥陀仏のお力によって現れ出た仏（化仏）は、ただお念仏をと念えたことだけを（選択）されて、「あなたは、〈南無阿弥陀仏〉とわが名をとなえた功徳によって、浄土往生の障りとなる諸々の罪の報いを消滅することができた。だからこそ、私はあなたを迎えに来たのである」と讃えられ（化讃）しています。それ故、〈選択化讃〉と云うのです。
第三の〈選択付属〉とは、第12章において明らかにしたように、『観無量寿経』では、前述の定善や散善といった諸行を説き明かしてはいるものの、その結びにおいて釈尊は、ただお念仏一行だけを結び取って浄土往生の行として、弟子の阿難尊者に相伝し、後世に遺すように託され（付属）しました。それ故、〈選択付属〉と云うのです。

【林田先生の解説】

前号から、最終章である第16章に入りました。本章の私訳は、これまでのものと異なり、引文である『阿弥陀経』の内容を解釈するものではなく、『選択集』全体の結論であると見なされてきました。

その冒頭で法然上人は、「浄土三部経」の最終的な帰結は、阿弥陀仏・釈尊・諸仏というすべての仏（三仏）が浄土往生の行としてお念仏を選び取り（撰取）、それ以外の諸行を選び取り（撰捨）するという〈選択（取捨）〉にあると結論づけられました。その上で法然上人は、8種類の〈選択〉を挙げられます（八種撰取）。前号では、その第一として、『無量寿経』で説かれるすべての〈選択〉の根本であり、本書の題名にもなっている〈選択本願〉について明らかにされました。

今号は、『無量寿経』に説かれる〈撰取讃歎〉〈撰留教〉の2種、〈観無量寿経〉に説かれる〈撰撰取〉〈撰化讃〉〈撰付属〉の3種、あわせて5種の〈撰取〉が説き示されます。ちなみに、〈撰留教〉の内容が説かれる第3章の本文中において法然上人は、14カ所で〈撰取〉の語を用いて解釈しているのに対し、残る7種の〈撰取〉については、それらが登場する各章の本文中に〈撰取〉の語はなく、この（八種撰取）の段ではじめて〈撰取〉を用いて解釈を施されます。こうしたことから、〈撰留教〉が、すべての〈撰取〉に通底する思想であることは明らかです。

それでは、5種の〈撰取〉それぞれについて概観していきます。
まず〈撰取讃歎〉については、第5章で引用された『無量寿経』で釈尊がお念仏一行を「大利・無上功徳」と讃歎されていることから、法然上人は

お経を納めたタイムカプセル 経筒

コラム



経筒（重文・平安時代・東京国立博物館蔵）
ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/?locale=ja>)より。

今号では、釈尊がはるか後の世までお念仏一行を留め遺される（撰留教）という考え方を紹介しましたが、平安時代には、自分たちの手で末法の世を越えた、はるか後の世に釈尊の教えを届けようと、筒などに経巻を入れ、土の中に埋める「埋経」が広く行われました。この、経巻を納める筒を「経筒」、経筒を埋めた場所を「経塚」と言います。

写真の経筒は、山梨県甲州市勝沼町の経塚から発見されたものです。康和5年（1103）の銘文があり、高さ約30センチ・口径約18センチの銅製で、重要文化財に指定されています。

これら経筒を作った人々が考えた「後の世」とは、弥勒菩薩が仏となつてこの世に出現するとされる56億7千万年後を想定していたと考えられています。

《念仏||讃歎||撰取》《諸行||不讃歎||撰捨》とされました。

《撰留教》については、第6章で引用された『無量寿経』で釈尊は、「法滅の時代になつても）この経を留める」と述べられます。法然上人は、「お念仏の教え」こそ『無量寿経』の主眼であり、またその末尾で釈尊がお念仏一行を（留教）されていることから、《念仏||留教||撰取》《諸行||不撰取||撰捨》とされました。

《撰撰取》については、第7章で引用された『観無量寿経』で阿弥陀仏が、念仏者だけを（撰取）すると説かれていることから、《念仏||撰取||撰取》《諸行||不撰取||撰捨》とされました。

《撰化讃》については、第10章で引用された『観無量寿経』で来迎した阿弥陀仏の化仏が、お念仏をと念えたことだけを讃えられます。その様子を善導大師は『観経疏』において（化讃）

《撰撰取》については、第10章で引用された『観無量寿経』で来迎した阿弥陀仏の化仏が、お念仏をと念えたことだけを讃えられます。その様子を善導大師は『観経疏』において（化讃）



●はやしだ こうじゅん
大正大学副学長。慶
岸寺（神奈川県 住職
法然浄土教、浄土宗
学が専門。「浄土宗の
常識」共著、朱鷺書房、
「法然と極楽浄土」青
春新書）ほか、著書、
論文など多数。

味わい方

このコーナーでは、『選択集』の現代語訳と林田先生による「解説」を掲載しています。現代語訳部分は、**藍色**（章題）、**緑色**（内容の根拠となる文章の提示）、**私訳**（引文に対する法然上人の解釈）で構成されています。